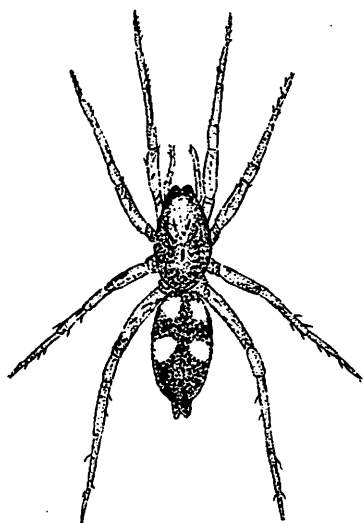


東京蜘蛛談話会誌

KISHIDAIA

No. 22



東京蜘蛛談話会

東京都日野市豊田1,896 萱嶋泉方

PHONE : 0425 - 81 - 7128

東京蜘蛛談話会例会報告

去る昭和45年11月29日、午前10時より、目黒区立大橋区民会館で談話会を開催した。当日は晴天に恵まれ、関東各地から多数の会員、同好の方々が参加された。今回は発表会形式をとり、松本氏の司会で、自己紹介を兼ね一人一話で行なわれた。会の概要は次の通りである。

1. 開会の辞 萱 嶋 泉
2. 大河内哲二・久保田寿一、「中学生を対象としたクモに関する意識調査」
クモという動物が中学生にどのように把握されているかを知るため、クモに対する第一印象と、クモに関する知識を3校の中学校で1～3年生311名を対象に調査した。第一印象では形態面では「気味悪い」という印象が強いが、生態面では興味をもっている生徒も多かつた。クモに関する知識では断片的なもの、誤解しているものも多かつた。又、クモの図を描かせるとマンガ的なものが圧倒的だつた。
3. 佐藤明 「コガネクモの生態」
コガネクモの獲物に対する反応を実験した、その結果、キュウリの輪切りやブドウなどの植物性のものから水を吸収する事実が発見された。
4. 昼 食 活動状況報告、不参加者の近況報告、学会からの最近のニュース報告(アシダカグモの体色モザイクが採集された。大阪生駒山350Mでカネコトタテグモが採集された。etc.)
5. 石山鉄幸、権田重雄、「玉川学園の真正蜘蛛類」
小林久俊氏の卒業後、引き続き学園内のクモ相を調査している。現在30科158種が記録されている。
6. 小野展嗣 「シモンクモについて」
屋内性のクモで時にヒメグモ様の網を張ることもある。産卵期は5～11月、孵化日数は約20日で1月に孵化幼生らしいものを発見。クサグモの幼生(3mm)を与えると4日間とりついていた。
7. 竹中英雄 「相模原のクモ」
相模原の近で採集したムツトゲイセキグモ、サカグテトリノフンダマンを回覧
8. 高野伸二 「トリとクモ」
クモはトリにとって餌として貴重である。その他巢の材料として糸や卵のうを利用している。クモがトリを食べる例は、スズメで2例、ツバメで2例網にかかっているのが発見されているが、体液を吸われたかどうかは不明。
9. 萱嶋泉 「農林害虫の天敵としてクサグモ類の価値」
KISHIDAIA No. 20-21を参照
10. 山川守 「丹沢の真正クモ類」
44年までに23科146種が確認された。
11. 新海栄一 「クモの見分け方」
ナミハグモ、コタナグモ、ナシジカレハグモを例に挙げて、一見しただけでは見分けにくいクモの取扱について。

KISHIDAIA, No. 22, 1971, Jan

12. 国見裕久 「農薬散布がクモ類に及ぼす影響について」

内外の教篇の論文から各農薬とクモの関係、散布方法とクモの動静との関係について。

13. 映画観賞

◎クモの生活

◎クモ —その糸と生活—

14. 閉会の辞 高野伸二

この後、記念撮影をして、6時30分解参した。各発表の間に意見交換、質問などもあり、終始なごやかな会であつた。この他の参加者は、小沢実樹、佐藤幸子、梅林力、笹川忠夫、古浜隆、伊藤富夫、新井彌生、高橋登、栗原輝代子、須藤牧子、鈴木奈保美、高林桂子、芦田政光、松本誠治の諸氏で計26名であつた。

反省など（東京蜘蛛談話会例会を終えて）

松本誠治

定刻より20分遅れて始まつた会は、萱嶋先生の開会のことばに続いて、自己紹介をした後、同じ方向に順次話題を提供していつてもらつた。昼食までに6名、昼食後休息を1回は喜んで19名の話があり、昼食時には会務報告（活動状況・会員数・不参加者近況・他のクモ同好会の活動状況などを報告）を行ない、最後は映画会でしめくくりをした。午前10時から午後6時15分まで8時間余りの会は高野先生の閉会のことば、写真撮影の後解散したが、外はずつかり暗くなつてしまつていて、渋谷方面の光が美しくかつた。

出席者は蜘蛛学会会員・談話会会員にその同伴者とバラエティーに富み（クモが好きでたまらないという点では完全に一致したが）その話も、自然保護・クラブ指導・応用クモ学・クモに対する意識・トリとクモの関係等々と、一人ではとつても考えもつかないものであつたが、いまメモを読みかえしてみると、一つ一つが興味のある又、自分でも調査・研究してみたいテーマであることが思いかえされる。勿論、そのようなことは無理であろうから今回のような会を数多く重ね、意見の交換をし、お互いに勉強していきたいと思つている。話の中で大切だなと思つたことがいくつかある。それは、クラブ指導に関して、クラブ員（生徒）に必ず何か役を与えて責任感をもたせるという笹川先生のお話や、興味や責任感を持たせるために顧問教師のガイダンス・オリエンテーションはクラブ活動には必要という久保田先生のお話は、自分の反省資料になつた。又、クモにきみがわるいという感情を抱くようになるのは、家庭での親とのかかわりあい原因があるように見え、なおかつ役にたつ動物であると考えるのは前述の感情と考え合わせると興味深く、教育の力がとても大きいことがわかるという久保田先生・大河内君の話に対して全員が肯首した点は、教員にとつては重大な事柄であるし、高野先生が野外活動を頻繁にすること、又、人によつては採集ということばに抵抗を感じるので採集会といわず、観察会というようにしたらといわれたことは、この談話会が、クモ同好者の底辺を拡大するという目的をもつていることから、実現せねばと思う。

司会をしていた自分が、全ての人の話に質問をしたのは、一人一人の話の聞き流すことなしに記憶の中にとめておいてもらおうと思つたこと、又、質疑応答の引き金でもなればと思つたことだけでなく、話の内容にひかれて司会という立場をはなれてしまつたことも事実であつた。そんな有様であつ

たから、会の進行は他の方々からみれば満足のいくものではなかつたかもしれない。今回の会が催されるにあたって、談話会の創立会員(?)全員が、準備にあたってくれたこと、それを成功の方向へ導いてくれた萱嶋先生、遠方からもかけつけてくださった出席者の方々、多忙中、欠席の報告に近況を付して下さった諸先生、貴重なフィルムをかしてくださった、椎村先生と思えば全ての方々の援助があつた。このことは談話会の目的になかつたものであつたといえる。次回も、今回と同様な盛会であることを願ひ、又、その実現に努力していきたい。

クモ談話会例会におもひ

久保田 寿 一

私は東亜クモ学会と当会に一年位前から入会はしていたが、会員との顔合せはまだ行なつていながつた。幸いにも今回は出席できることになり、めつたにない発表も依頼されて共同で発表することができた。以下、出席の感想を述べさせていただきます。私は今までに種々の会合、研究会等に出席していますが、運営、進行、司会者側の一方通行ばかりで、余り意見発表などない場合が多かつたが、今回の会においては、非常によく意見発表がなされた。自分としても非常に気楽に話したり発表することができ、なごやかに過すことができ、又時間の経過を忘れるほど楽しい会であつた。以下、話題の中から感じたことを述べてみよう。

1. クモに対して私達が考えられる一般常識的なこと
2. 専門的なこと (イ)クモの種類とその分布、生態的なこと (ロ)さらに深く切りこんだ研究例、天敵としてのクモの研究、クモ相の研究
3. 会員相の構成がバラエティに富んでいた。大、高、中、小の教授、教員、大、高中学生、研究所員、会社員など、又女子の会員もいた。

出席者全員が非常に研究心、探求心に富み、話題が尽きず終了がおしかつた。私は都合で最後まで話ができなかつたが、初めて出席した私はより以上、クモについて勉強し研究しようという意欲がわいてきた。やはりクモに対して非常によく研究している同好の士ばかりであり、クモを通して自然を理解し、生物の生態を探求していこうという共通的な気持がうかがわれた。

希望したいと思います。こういう会をせめて年三回位行なつてほしいものです。いろいろな話を聞くことができ、より以上クモに対して知識がふえていくと思います。より以上研究していきたい気持にかられます。萱嶋先生からの話しのあつた12月10日P.M 7:30、NHKの日本の自然一日本のクモ—を視聴しましたが、クモという動物の生態をあらためていろいろ知りました。今後の研究に参考となりました。できれば、こういった仕事も大いにのばしてほしいと思います。幸いにも私は教員故、生徒の中にも興味をもっている者があるので、これらを奨励して私達の仲間を増やしていこうと思います。

KISHIDAIA, №22, 1971, Jan

高野伸二（会員）

昭和25年10月23日はよく晴れた暖い日だった。当時、植物専攻の学生であつた私は、数人の仲間といつしよに、神奈川県鎌倉の山の尾根歩きをした。植物科の学生のくせに、どうも動物好きの私は、くびからは野鳥観察用の双眼鏡を下げ、ポケットにはクモ用の管ピンを何本かひそませていた。この附近はまだ自然が残つていて、常緑広葉樹の大きな林もあつた。夏鳥の最後と思われるアマツバメが青空を渡つて行つた。近くの林から舞い立つたツミらしい小形のタカが上昇気流にのつて高空に輪をえがいていた。正午近くになつて、天園という所につき、昼食。その後近くをぶらぶらしていると、地上約2.5mの空間に垂直の円網を張つて、その中央にいる中形のクモを見た。形からオニグモであることはわかるが、空をバツクにしているので色はわからない。落ちていた枯れ枝で、あみごとすくいとつてみて、どきりとした。今までに見たことのない美しいオニグモであつた。腹部上面は、黄色、白、黒のこまかい斑紋で飾られ、腹面は黒くて、中央に美しい鮮朱色の斑紋がある。幼い頃からクモが大好きであつたが、名まえのわかる図かんもないままに、ごく普通のもの以外は、そうそうたくさんの種名も知らないで過して来た私であつたが、この美しいクモの名はぜひ知りたと思つた。そして、その夜私は水彩絵具で刻明に写生をした。

その後、私は、野鳥関係の仕事についたが、昭和33年に東亜蜘蛛学会に入会すると、8年間疑問のままになつていたこのクモの名前を知りたいと思ひ、当時の写生図をそえて、八木沼先生にお便りを出した。そしてこのクモがニシキオニグモであることを教えていただいた。それから、また10年の年月が流れ、私は野鳥の撮影に、方々を歩くようになった。野鳥撮影のかたわら、好きなクモの撮影も時々していたが、いつも心に想うのは、あのニシキオニグモをカラーで何とかうつしてみたいということであつた。鎌倉の天園にも、その後行つて見たが、次第に自然がこわされ、ゴルフ場になり、林もなくなつて、もうニシキオニグモもいそうになつた。どこに行つたらニシキオニグモに出会えるのか。保育社の図かんには、本州の北部及び高地とあるが、あまりに漠然としているし、野鳥を訪ねて本州中北部の山はよく歩すが、1度も見つけることはできなかつた。ATYPUSの分布資料にもニシキオニグモの名は出てこない。そろそろニシキオニグモをカラーで撮影することもあきらめかけていたが――

昭和44年10月に野鳥の調査のため千葉県館山市郊外にある安房神社に隣接する県立パードセンターに出かけた。オウギグモがあみをたたむようすなど興味深くみて一泊し、翌日の午前10時頃、帰りのバスを待つていた時、近くの小川の上に枝をひろげたコナラのしげみから、大きな円網が垂直に張られているのを見つけた。この時期に、こんな大きな円網を張る主は何だろうと、その枝を引き寄せてクモを追い出したとたん、私は思わずニシキだ、ニシキだと叫んでしまった、同行のトリ屋たちはびつくりしたが、なるほどきれいなクモだと感心した。腹部下面の赤色紋も鮮か、体長約25cmある立派な♀であつた。手帳にこのことを記録しようとして気づいたのは、この日は10月23日、鎌倉ではじめてニシキオニグモと出会つたのと奇しくも同じ日ではないか。まるまる19年ぶりの再会というわけである。かくして、腹部上面の錦織りも、下面の赤色紋もバツチりうつしてやつた。1カ月後の11月末にも、同地でシイの枝間に円網をはり、シイの葉にひそむ♀を見つけ、これは萱嶋先生にさしあげた。この個体はシイの葉の表に、足をややひろげてひそんでいたが、その葉の表面には多くの糸の附着点が見られた。最近のKISHIDAIAによれば、ニシキオニグモは、神奈川、埼玉でも採集され、新海栄一さんに伺つたら、東京を除いた関東各県で記録されたことになるという。緑の深いニシキオニグモを東京でさがしてみたいと、私は思つている。

文献紹介

国見裕久

Biological Control of the Greenbug by the
Spider *Phidippus audax* (Araneae:Salticidae)

R. MUNIAPPAN and H. L. CHADA

Journal of Economic Entomology

Vol. 63 No. 5 p1712 (1970)

クモ類は、その捕食行動においてよく知られている。昆虫の生物防除としてのクモの意義については、最近まで、まだ注目されていない。

サトウモロコシ畑に存する昆虫を19種のクモが捕食していることは、既に報告されている。(Bailey and Chada 1968)、この研究で、ハエトリグモの *Phidippus audax* (Hentz)、*Metaphidippus galathea* Walckenaer *Habronattus coronatus* (Hentz) の3種は、この研究に用いたすべての昆虫を捕食することが明らかになった。

本研究は、温室内において、大麦栽培のポットに入れられたムギフタマタアブラムシ (*Schizaphis graminum* (Rondani)) に対する *P. audax* (Hentz) 幼生の有効性を試験したものである。

Rogers¹ 大麦は、6つの6インチのポットの中で栽培した。大麦が2インチまで成長したとき、1ポット当り、大麦の苗3本に減少させた。そして、各々のポットに50頭のムギフタマタアブラムシを入れた。6ポット中3ポットは、2齢の *P. audax* (Hentz) の幼グモを3頭ずつ入れ、残りの3ポットはムギフタマタアブラムシのみで、幼クモは入れなかつた。

ポット中の大麦の状態は、周期的に観察した。最初の2~3日の間は、数頭のムギフタマタアブラムシの加害が、すべてのポットの大麦に見い出された。

6日後、幼クモを入れなかつたポットでは、ムギフタマタアブラムシの食害のため、大麦の葉が黄変した。

9日後、クモを入れなかつた3つのポット中2つのポット中の大麦が、ムギフタマタアブラムシのため、枯れてしまった。残りの1つのポット中の大麦も11日後に枯れてしまった。

クモの幼生を入れたポット中の大麦は、ほとんど又は、全く被害を受けていない。(11日目)

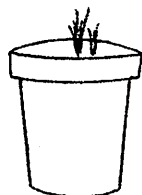
幼クモの入ったポットでは、1つを除いては、ムギフタマタアブラムシの障害が11日目でなくなった。残りの1ポット中の大麦も、14日目にムギフタマタアブラムシの障害がなくなった。

P. audax (Hentz) の幼クモは、ムギフタマタアブラムシの生物防除において、小さな麦類では、重要であることが、本実験によつて明らかになった。

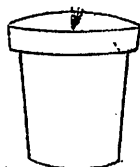
KISHIDAIA, No. 22, 1971, Jan

1

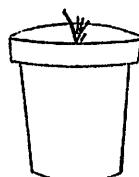
Fig 1



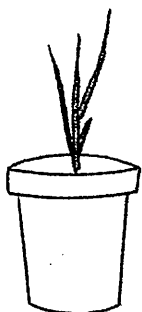
1



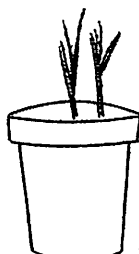
2



3



4



5



6

- 1,2,3 幼クモ (Paudax) を入れていないもの
ムギフタマタアブラムシによつて枯れた
4,5,6 幼クモ (Paudax) を入れたもの
ムギフタマタアブラムシの被害なし

(写真より転写)



クモの記事 (4)

松本誠治

植村利夫著
原色通俗動物図鑑
昭和11年12月20日
青雲社書房

福井玉夫先生の杖閣で脊推動物・筋足動物・軟体動物などが全図が色刷りが30図版になつている。その内クモは2図版分16種類がのつており、全種に体長・生態の説明がついている。

石沢慈鳥著
写真生態 路傍の昆虫
昭和15年4月10日
三省堂

春・夏・秋の昆虫とに分けて掲載。237枚の黒白写真。クモの種類は春にワカバグモ・コケオニグモ、夏にキハダエビグモ・イオウイロハシリグモ・マユタテアズテグモ・秋にハナグモの6種7枚の写真がある。マユタテアズテグモは現在ではアズテグモと和名の変更統一がされている。

更統一がされている。

神戸伊三郎著
採集・分類・形態・生態・発生
昆虫学習図鑑
昭和24年6月20日
東洋図書

(九) くもがた類としてあり、内容は糸を中心に概説し、車形の網を作るもの、たな形の網を作るもの、住所の巣を作るもの、さすらい歩くものとして一般的な種を分類してある。本書の特長として記されてある内容には少々オソマツな本である。

ジュール・ルナール著 岸田国土訳
博物誌
1960年1月15日
白水社 ¥430

紹介する必要もない程有名な本である。くもとして2篇あるので全文紹介しておく。「髪の毛をつかんで硬直している。まつ黒な毛むくじやらの小さい手」「一晩じゆう、月の名によつて、彼女は封印をはりつけている」ポナールの挿図はクサグモのようでもあり、網

は円網のようでもあり同定不可能

KISHIDAIA, No.22, 1971, Jan

編 集 後 記

明けましておめでとうございます。

当談話会も40名を越える大家族になり、今まで通りでは会員相互の意志の疎通をはかることができないとの意見もあり、大規模な例会を開催することになりました。幸い、今回の例会はここに報告した通り好評でした。残念ながら出席できなかつた方々も、この号で会の雰囲気を感じていただけるものと存じます。

年頭にあたり、先日編集会を開き、今年の大よその行事計画をたてました。そのつど連絡いたしますが、なるべく時間を空けて参加されますよう、お願いいたします。

3月27日(土)	クモ観察会	(今熊山・五日市)
5月5日(水)	例 会	(杏林大学 八王子市)
8月上旬	クモ観察会	(奥秩父)
10月	クモ学会大会	(東京)
12月	クモ観察会	

KISHIDAIA №22

1971年1月10日 印刷

1971年1月11日 発行

編集者 大河内 哲 二

発行者 萱 嶋 泉

発行所 東京蜘蛛談話会
東京都日野市豊田1896 萱嶋 泉方
〒191 PHONE 0425 (81) 7128

印刷所 埼玉県身体障害者更生指導所タイプ孔版科
